萩原朔太郎の変体仮名の用法

――「ソライロノハナ」「習作集第八巻」を中心に――

久保田　篤

一

いわゆる変体仮名について、それらが役割を終えようとしていた最後の時期に、どの変体仮名が残り、どのような用いられ方をしていたのかという点の解明は、特に手書きの資料を対象としたものは、まだあまり行われていないと思われる。出版物等においては既に基本的に現行字体のみとなっていた時期[1]に、手書きにおいて残り火のように使われ続けていた変体仮名にはどんな特徴が見られるのか。この点を探る試みの一つとして、今回は萩原朔太郎の手書き資料の調査を行うことにしたい。

萩原朔太郎が大正二年（一九一三）四月頃に自作の短歌から四二〇余首を選び手書きして自装した歌文集「ソライロノハナ」の、はじめのあたりをざっと見ると、目に付くものとして、次のように変体仮名〈ゐ〉〈ち〉〈よ〉を見出すことができる（仮名字体を〈　〉に入れて示す）。この歌文集の最初の部分「自叙傳」から、変体仮名の使用されている部分を少し示してみる（「自叙傳」の最初の頁を「一」として何頁目にあるかを漢数字で、何行目にあるかをアラビア数字で示す）。

私の生活ゐ藝術を要求するのでちく藝術が私の生活を支配して行く（三1）

怪しげちレストランの窓よもたれて（七2）

なお、この「自叙傳」部分を見ると、仮名カとニ（現行字体と変体仮名のように複数の異体を有する平仮名を、ここでは片仮名で示すことにする）においては〈ゐ〉と〈よ〉は時に見られる程度の数で、多くは〈か〉〈に〉を用いている（例えば右に示した例でも格助詞「が」二つのうち一つは〈か〉になっている）のに対し、仮名ナは専ら〈ち〉となっていて、三つの変体仮名の使われ方は一様ではないことも窺われる。

先に大正生れの作家の手書き資料における変体仮名を調査した際、大正生れとなるともう変体仮名を使用する作家は限られてくるが複数の作家に共通して見られた変体仮名は〈ち〉か〈よ〉であり僅かに〈ゐ〉も用いる人がいるということ、また複数の変体仮名を使用する作家は極めて少ない（すなわち、基本的には〈ち〉のみ用いる、または〈よ〉のみ用いる）という点を見出すことができた[2]。萩原朔

太郎の用いた変体仮名として目に付いたものが、大正生れの作家に残っていたものと同じ〈ゐ〉〈ふ〉〈ほ〉である点はやはり興味深く、しかしこの三つの変体仮名すべてを用いる点は大正生れとは異なっていて、明治一九年（一八八六）生れの朔太郎の用字から、大正生れの少し前の段階の変体仮名使用を窺うことができそうである。

一方、萩原朔太郎より年長の作家はどうかというと、慶応三年（一八六七）生れの夏目漱石については、用いた変体仮名の考察が幾つか既に行われているが、例えば『道草』の調査では、異体関係にある字体が存在する仮名としてカ・ク・シ・タ・ナ・ニ・ヨ・レ・ヰがあって〈ゐ〉〈く〉〈ま〉〈さ〉〈ふ〉〈ほ〉〈ち〉〈ま〉などが使用されているようである。[3] 当然予想できることであるが朔太郎より多くの変体仮名が使用されている。これらのうちの三つが萩原朔太郎においても主に使用する変体仮名として残ったということになるが、少ない種類に限られたものになってきている。限られてはいるが複数の変体仮名を用いているということから、最後の時期の変体仮名を考察する最適な資料の一つである。変体仮名を多く用いる段階と、僅かに一つのみ使用する段階との、中間段階の実態を見ることのできる貴重なものだとも言える。[4]

ところで、今回は、更に、仮名シの〈し〉と〈し〉を分けてみることにする。大正生れ作家の調査では、仮名シの平仮名字体について、第1画を点とし2画で書く字体も見られるものの、続けて書かれる場合も多く、現行字体との区別が難しいため、2種類を分けなかった。しかし、萩原朔太郎の場合、はじめに示した「ソライロノハナ」を見ていくと、一筆で書く現行字体〈し〉と、2画で書く変体仮名との区別が可能である。そこで〈し〉と〈し〉を分けて見ることにした。ただし、形の近さ等の点から見て、変体仮名とは言い難く、今回便宜的にこれも合わせて見るというものではある。

なお、朔太郎の葉書・書簡をある程度見たところ、2画の〈し〉は用いられず、現行字体の〈し〉のみが使用されている。また、一九一四年前後の創作と判断される草稿類を見ると、乱雑に書かれた下書き類では〈し〉のみであるのに対し、原稿用紙の升目ごとに1字ずつ書き入れられた原稿的なものには〈し〉とともに〈し〉も使用されている。[5] 同じ手書きのものであっても、浄書的に書くというような心構えのある場合とそうでない場合とでは、仮名字体使用にも違いが生じていたと考えられる。この点を考慮し、今回は、より字体使用に配慮がなされていたかと想定される、浄書的な手書き資料を、調査することにしたい。

主に調査した資料は、はじめに少し例を示した、大正二年（一九一三）の自筆歌文集「ソライロノハナ」（中綴じの本の形に仕立てられている）と、第八巻と第九巻の2冊が残っている「習作集」（「愛憐詩篇ノオト」とも呼ばれる）のうち浄書的な性質[6]の窺われる第八巻（巻頭に「一九一三、四」と記されている）の二つである。大正初期のこの二つの資料に加え、昭和九年（一九三四）刊行の詩集『氷島』の原稿も、昭和期の浄書的資料として調査した。これらに適宜ほかの手書き資料も参考に見ながら、使用実態の検討を行うことにする。[7]

二

自筆歌集「ソライロノハナ」において使用されている変体仮名を、まず見る。「ソライロノハナ」は「自叙傳」「二月の海」「若きウエルテルの煩ひ」「午後」「何處へ行く」「うすら日」から成る（「自叙傳」には「一九一三、四」、「二月の海」には「一九一一、二」と記されてあるが、以下の部分にはこの類の記載はない）。仮名カ・ナ・ニおよびシの用いられた箇所を示すことにする。（例の下には、各部分の最初の頁を1頁とした場合の何頁目にあるかを漢数字で、その頁の何行目にあるかをアラビア数字で記す。）

最初の部分「自叙傳」の前に、「空いろの花」という詩（末尾に「一九一三、三」とある）と、その次にある「目次」の裏に、「一九一三、四」と記したあと「年ごろ詠み捨てたる歌／凡そ一千首の中より」と始まり「あらぢ（ママ）かし」で終わる序文のような部分とがある。これらの部分はそれぞれ1頁分しかない（したがって何行目にあるかのみアラビア数字で記す）ためか、〈あ〉〈ふ〉は、見られない。仮名カ・ニは現行字体〈か〉〈に〉で書かれている。例を〈ふ〉とともに示しておく。詩「空いろの花」の、〈か〉の例は「たはかれどきの薄らあかり」（2・2）・「われば**かり**」（6）・「かくば**かり**」（9・9）、〈ふ〉の例は「ありや**ふ**しや」（4）、〈に〉の例は「石垣にもたれて」（5）・「草のあはひに」（7）、序文的なところの、〈か〉は「あるか**ふ**きかの」（7・7）・「ためいきば**かり**」（8）・「あらぢか**し**」（10）、〈ふ〉は右の7行目の例と「せんかた**ふ**きは」（9）である。

仮名シについては、詩「空いろの花」は、「ありや**ふ**しや」（4）・「哀しさ」（9）の〈し〉のみであるが、序文のほうには2種類が見られ、

〈し〉

悲しき日、樂しき日（6・6）

〈し〉

あらぢか**し**（10）

このように末尾は〈し〉で書かれている。

「自叙傳」の部分には、はじめに記したように、〈あ〉〈ふ〉も見られるのであるが、〈あ〉は、前節に示した1例だけである。これ以外はすべて〈か〉が用いられ、「その時から初まる」（一4）・「歌に接してから」（一8）・「此の時から」（二4）・「朝から晩まで」（三5）・「五煩はしい旅から歸る」（三10）、「苦心したか分ら**ふ**い」（二9）、「出来たかも知れない」（四9）、「おどけた者としか見られ**ふ**く」（五9）、「自己慊忌とか厭世とかいふ」（四6・6）・「死とか生とかいふこと」（四11・11）、「笑ひ**ふ**がら」（五5）・「聽き**ふ**がら」（六10）、「幾人かは」（八2）、「かういふ旅」（三8）・「かういふいら〳〵した心」（一一1）・「かうした頽唐」（一一4）、「うつりかはり」（一二3）、「歩か**ふ**ければ**ふ**ら**ふ**かった」（三6・6）・「し**ふ**かった」（四1）・「止ま**ふ**かった」（九1）、「微か**ふ**にほひ」（一三1）など、43例見られる。

また、〈あ〉の1例は、「私の生活あ藝術を要求する」という格助

詞「が」に用いられたものであるが、他の格助詞「が」は、「二首がその處女作である」(二3)、「藝術が私の生活を支配して行く」(三1)、「其等のものが若きウエルテルの煩ひの原因であった」(四3)、「心の芽生がひそんで居る」(四7)、「成ってしまふことが出来たかも知れふい」(四9)、「靄がはれて行くやうに」(五2)、「幻影が消えて行った」(五3)、「あるものが薄気味悪く笑ひふがら」(五5)、「まだ暫らくの間がある」(一二9)、「唱ってくれる人があるふらば」(一三3)など、18例あった。

〈ふ〉は、〈あ〉よりはやや多く、前節に示したもの以外では、「自叙傳」には次のものが見られた。

〈ふ〉

でふければ私ふは生きて居ることが出来ふかった(九2)
実際ふは苦痛を求めるといふこと(九5)
憂愁と死ふ向って(九6)
何事ふも興味を失ふ(九11)
憂愁の闇路ふにほふ螢の青きためいき(一一8)
すべてのリズムふまでくっきりとあらはれて(一二4)
空色の花ふも似たる私の(一二6)

以上のように格助詞「に」に用いられている。

一方現行字体の〈に〉はこれよりずっと多く用いられる。5頁目までに見られる例を示してみると次のようになる。

〈に〉

榮次氏によって(一7)　歌に接してから(一8)
人にふってしまった(一9)　第一頁(ママ)に出て居る(二2)
作歌によって慰められるやうに成った(二4)(二5)
行く様にふって(三2)　少年にとって(三3)
巡拝するためんい漂泊して(三6)
倒れそうにふった(三9)　憧憬の影に(四5)
見出さずに終ったら(四8)
ヂレッタントに成ってしまふ(四9)　次第に私は(四10)
眞劍にふって考へるやうに成って来た(四11)(五1)
靄がはれて行くやうに段々と私の心から(五2)
私の前に(五5)　ばけもののやうに(五8)

これ以降でも、格助詞「に」の例は非常に多く、また「やうに」などにも多く用いられ、「にほふ」(一一8)・「にほひ」(一三1)のように自立語語頭にも用いられている。

仮名ナは基本的には〈ふ〉で書かれ、「自叙傳」の部分には53例見られるが、1例だけ現行字体〈な〉も使用されている。

成らふければふらなかった。(一〇1)

これを見ると、〈ふ〉の出現が続いてしまう場合に、視覚的変化の目的で〈な〉を混ぜているとも考えられる。しかし、他の箇所では、「歩かふければふらふかった」(三6・6・6)のように、〈ふ〉が繰り返し出現することを避けていない。

仮名シも殆どすべてが〈し〉である。次に5頁目までに見られる〈し〉の例を挙げてみると、

〈し〉

然し又（二2）　苦心したか分らふい（二9）　支配して（三2）
痛ましいこと（三4）　漂泊して（三6）　然し信心深い（三11）
決してこの煩はしい旅（三10）歸ることをしふかった（四1）
然し（四5）　美しいヂレッタントに成ってしまふ（四8・8）
そして（五4）　怖ろしい（五4）　跳出した（五6）
見られふくふってしまった（五9）

このように、（語頭は漢字で書かれることが多いため）語中・語末の例が多いが、「しなかった」「しまった」のような例もある。これ以降も同様で、「しみしみと」（七3・4）のような語頭の例など、「自叙傳」には全部で34例の〈し〉が見られる。一方の〈し〉は1例のみであった。

〈し〉

若し節をつけて唱ってくれる人があるふらば（一三3）

1例だけなので確かなことは言い難いが、「自叙傳」の部分の最後の頁であることが関係するか。

続いて、次の部分「二月の海」を見る。この部分には〈ふ〉と〈ふ〉もある程度用いられているので、やや多くなってしまうが仮名カとニの全用例を示しておきたい。まず仮名カの例を示す。

〈か〉　57例

愚かふる（一1）　混乱（こんが）らかった（一3）
浴びふがら（二3）　聴かんと（二8）
都をのがれ（三1）
掌の中から指の間をすべり落ちた（三6）
枯艸の上をわが行けば（六1）
干からびた筆草ばかりふ昔ふがらに生へて（六3・3・4）
いつのまにか　たそがれ時うすら寒い潮（六7・7）
風が涙よぬれた私の頬を吹いて居た（六8）
小磯ふるかの砂山（七1）　小磯が濱の筆くさは（七3）
松林の中から（八2）　旅から帰って（八4）
何故（なぜ）か女は（一〇3）　かの少女（一〇6）
かく言ひ　かれは（一一6・6）
泣きてかへらん（一二1）　いかで知るらん（一二2）
釋かうとしたのは禺かであった（一三2・2）
生れふがらに（一三5）　居るのではあるまいか（一三6）
貧（むさ）って居る方が、まだしも幸福（一三9）
そのかみの（一四3）　語り合ひたかったのである（一五6）
どんふにか驚き（一五9）　かつは悦ぶであろう（一六1）
此の世から消えて（一六5）　ひかるとき（一七5）
うたって居るばかりであった（一八6）
鷗の一群が私の前をよぎって（一八7）遙か先の（一八7）
かくばかり（一九4・4）　耐えがたきかふ（一九5・5）
置かれてあった（二〇2）　禿げ落ちてから（二〇5）
海ばかり眺め（二〇6）　暮らして居たのか、（二〇6）
腰かけた時（二〇7）　何處からともふく（二〇7）
置かれたまま（二一1）　さびしからずや（二一2）
幾人の肺病患者が来て（二一3）　かのベンチ（二一5）

かのベンチ（二一5）　見つめちがら（二二2）
かつは さびしく海の音きく（二二6）
けたゝましい汽笛の音が眞晝の沈黙を破って（二三1）
木立の間をかすめるやうにして（二三5）
都へかへり旅人は旅を急がちければちらぬ（二四1・1）

〈ゐ〉　6例
心の圧迫ゐ私を海の方へと導いた（一4）
海ゐ戀しくちりたれば（一6）
靜寂の境趣ゐ漂ふて居た。（二1）
干からびた筆草ばかりゐ昔ちがらに生へて居た（六4）
そのかみの虎ゐ涙も悲しめる（一四3）
哀れの少女ゐ思ひがけちい昔の友の音づれをきいた（一五8）

これを見ると分かるように、〈ゐ〉の使用数は仮名カのうちの1割ほどであるが、その6例すべてが格助詞「が」に用いられている。一方の〈か〉は用例数が多く、同じく格助詞「が」に用いられたものも「わが行けば」「風が」「小磯が濱」「居る方が」「鷗の一群が」「患者が」「音が」の6例見られるが、格助詞「が」以外に用いられたものも多く49例見られ、自立語語頭の例もあった（「かれ」「かへらん」「かつは」「かく」「かの」「かすめる」「かへり」等）。このように、主に〈か〉を用いる中で、格助詞「が」の場合には〈ゐ〉を半分ほど混ぜて使用している。

続いて仮名ニの現行字体〈に〉と変体仮名〈ほ〉の、それぞれ用いられている部分を示す。

〈に〉　62例
汽車にのりたくちりたれば（一5）　冬の磯邊には（二1）
そここゝに投網を編んで（二4）　物憂げに遠い濱邊を（二5）
海に来て（三1）　潮鳴る音に心悲しむ（三2）
漂泊者のする様に私は（三3）例の砂山に寝ころんで（三4）
撫るやうに私の掌の中から（三6）　砂に寝ころびて（四3）
砂山にまろびて（五4）　足もとに飛ぶ（六2）
濱には干からびた筆草（六4）
稚子のやうに声をあげて（六6）　寄望に輝やく瞳を（八1）
かの砂山に忘れしは（七1）　少女の群とバルコンに（八7）
海の色にもまして（八5）　おばしまに（九3）
我ちらちくに（八8）
月の出待つに似たれど（九4）
海水浴町よも流石に（一〇1）
夜の灯（ともしび）は紅くにほった（一〇2）
私にあることを訴へた（一〇4）　空耳にきく（一一4）
海に来て（一二1）　寝し故に（一二3）
にほひこそすれ（一二4）生れちがらに漂泊の運命を（一三5）
冬の海に来て（一三7）　巷の中に（一三8）
一夜にして（一四2）　海に告別した（一四2）
平塚の病院に（一五1）　海に望む（一五4）
バルコニイに（一五4）　カアテンの影に啜り泣く（一五7）
どんちにか（一五9）　既にそこには（一六3・3）

影のやうに此の世から（一六5）
病院のバルコンに海を眺めて（一七3）
月光に魚の鱗のひかるとき（一七5）　窓にもたれて（一七6）
あはれにも（一八1）
濱邊には誰れ一人さまよふ者もふく（一八3）
波うち際に展開した（一八8）　兵士のする様に（一八9）
二月の海に来て見れば（一九2）
悲しき海にたゞ一つ（一九4）
砂山にイスパニヤ形のペンチが置かれてあった（二〇1）
寂しい砂汀の上にたった一個（ひとつ）のベンチ（二〇3）
あんどろめだの様に（二〇6）　片隅に腰かけた（二〇7）
砂山の上に置かれ（二一1）
如何にさびしからずや（二一2）
砂に書いた文字を（二二2）　其處に横はって居た（二二3）
砂山にうちはら這ひて（二二5）
急にけた、ましい汽笛（二三1）
漁村に響き渡った（二三2）　かすめるやうにして（二三5）

〈よ〉　6例
海よは帆を張った漁船も（五1）
私はその赫土の上よ身を投げて（六5）
風が涙よぬれた私の頰を吹いて居た（六8）
さびれきった冬の海水浴町よも流石に夜の灯（ともしび）は（一〇1）
海よは一つの帆影も見えふい（一八4）
其處よはたゞ松籟と濤声とが何時もの哀歌をうたって（一八5）

変体仮名〈よ〉も、仮名ニのうちの1割弱の使用であるが、その6例すべてが格助詞「に」の箇所に用いられている。一方の数多い〈に〉も、同じく格助詞「に」として用いられる場合が多く、この点は仮名カの場合の〈か〉が格助詞以外に用いられることのほうが多かった点とは異なるが、格助詞として用いられる箇所に時々変体仮名が交じるという点は共通している。このほか〈に〉は、自立語語頭にも用いられている（「にほった」「にほひ」など）。

以上のように、「ソライロノハナ」の「二月の海」の部分の調査から、萩原朔太郎は、変体仮名の〈ろ〉と〈よ〉を、格助詞「が」と「に」を書く場合に、現行字体〈か〉〈に〉とともに時々使用していたということが窺われる。

次に、シの仮名の使われ方を見ることにしたい。現行字体である〈し〉と、最初に点を打った下に現行字体の形を書いて2画となる〈し〉が、どの部分に使われているか示してみる。

〈し〉　44例
忌はしい情慾（一2）　病人らしい都の人（二5）
寂しく思はれた（二6）　来しにあらねど（二8）
心悲しむ（三2）　哀しさ（四1）
さびしさ（四2）　哀しみて鳴く（五5）
忘れしは一（七1）　思はざりしを（七4）
祝した（八3）　むかし女を戀したりき（九1）
おばしまに（九3）　悲しい眼付をして（一〇4・4）

悲しめる（一〇6）　知るよしも（一一1）
いそしみて彈く（一一2）　たゞに悲しみ（一一4）
美しき言葉（一一5）　美しき海（一二3）
寝し故に（一二3）　潮の香あびし にほひこそすれ（一二4）
飽和したやうふ（一三1）　釋かうとしたのは（一三2）
漂然として（一三3）　悲しむよりは（一三8）
痛ましい（一三9）　まだしも（一四1）
一夜にして（一四2）　面やつれした（一五5）
眺めてありし女よ（一七4）　痛ましい（一八1）
展開した（一八8）　悲しみて（一九2）
悲しき海に（一九4）　寂しい砂汀の上に（二〇3）
暮らして居た（二〇6）　痛ましい（二〇8）
さびしからずや（二一2）　悲しき人（二一6）
けたゝましい（二三1）　うら侘しい（二三2）
かすめるやうにして（5）　悲しみて（二四4）

〈し〉　6例

はしって居た（五2）　歌をうたひし我ふらふくに（八8）
むかし女を戀したりき（九1）　すべて美くし（九2）
濡すよしふし（一四4）

このように、〈し〉は仮名シのうちやはり1割程度使用されている。最初の1例以外は語末的な部分とも言えそうであるが、「二月の海」の用例だけでは特徴を見出すには数が少ないかもしれない。

残る変体仮名は〈ふ〉であるが、「二月の海」の部分においては、仮名ナはすべてこの変体仮名〈ふ〉で書かれている。一応、この部分の〈ふ〉の例を示しておく。

〈ふ〉　34例

愚かふる（一1）　のりたくふりたれば（一5）
戀しくふりたれば（一6）
力のふい午後の日光を浴びふがら（二3）（二3）
泣きたくふりぬ（四4）　二つ三つふらず（五1）
力ふく（六2）　音もふく影もふい（六3・3）
小磯ふるかの砂山（七1）　如何ふらん小磯が濱の（七3）
骸骨とふって（八4）　歌をうたひ我ふらふくに（八8・8）
不孝ふる繼子（まゝこ）の如く（九5）　知るよしもふければ（一一1）
美しき言葉すくふの少年よ（一一5）
嫋めて（ルビ　ふま）（一一6）
飽和したやうふ思い心（一三1）　生れふがらに（一三5）
音もふい（一五7）　どんふにか（一五9）
果敢ふい（一六2）　居ふかったのである（一六3）
見えふい（一八4）　耐えがたきかふ（一九5）
何處からともふく（二〇8）　人もふき（二一1）
元気のふい旅びとは（二二1）　見つめふがら（二二2）
急がふければふらぬ（二四1・2）
何とふく泣きたくふりて（二四3・3）

以上に見てきたとおり、「ソライロノハナ」の、「自叙傳」「二月の海」の部分に見られた変体仮名〈あ〉と〈よ〉は、使用箇所が格

助詞「が」「に」に限定されている。ただし格助詞「が」「に」であっても、「が」の場合は〈か〉と〈あ〉が同程度用いられ、「に」の場合は〈に〉のほうが〈ほ〉よりもずっと多く、格助詞はすべて変体仮名を用いて書くというわけではない。〈し〉については、右に見た部分では語末に用いられる傾向があるとも言えそうであるが、はっきりとした使用傾向を見出すにはまだ用例数が少ない。〈ち〉は、いわゆる変体仮名ではあるが、萩原朔太郎においては仮名ナの基本字体というべきもので、現行字体〈な〉のほうが変体仮名的に用いられている。

「二月の海」に続く、「若きウエルテルの煩ひ」「午後」「何處へ行く」「うすら日」の部分においても、右に述べた特徴が同様に見られるので、注意すべき点を除いては簡単な示し方をしておく。また、仮名シ・ナについてはやはり傾向が見出し難いため、以下この資料に関しては検討を省くが、仮名ナのほうは、「何處へ行く」「うすら日」には〈な〉が見られることから、この〈な〉の例のみ示しておく。

まず「若きウエルテルの煩ひ」の部分であるが、仮名カについては、変体仮名〈あ〉に格助詞以外の使用があった。その2例は語中で、うち1例は振り仮名の例である。

〈か〉格助詞以外　57例（「かたへ」「はらから」「花やかに」等、種々の箇所）

格助詞「が」　13例（わが3、己が1、我等が1、君が6、そが中1、名詞＋が2「はらからが」「街の子が」）

〈あ〉格助詞「が」　4例

鬼どもあ笑ふ声（二七1）

天地あわれのくびきにかゝる苦しみ（二八1）

我あ心（三三3）

地獄の叫喚あ待ち居る（二七3）

格助詞以外　2例

縁ふあき（九3）

戰爭（振り仮名「たゝあひ」）（二七1）

仮名ニについては、変体仮名〈ほ〉は3例のみであるが、断定の助動詞の連用形もあった。

〈に〉左の格助詞・助動詞等以外　7例（「にほひて」「べにつばき」「くに」等）

副詞の「に」　4例（「ついに」「交互（かたみ）に」等）

断定助動詞・形容動詞連用形　10例（「君にして」「素直にして」「ちまじいに」等）

完了助動詞連用形の「に」　3例（「去りにき」「更けにけり」等）

格助詞「に」　67例

〈ほ〉3例

花ほおちて花ほ教えし（一一3）

夜は夜ほて晝は晝にて（三三1）

この「若きウエルテルの煩ひ」部分には、他の部分には見られな

い変体仮名〈ゑ〉が用いられていた。この変体仮名は、今回の調査したほかの資料には全く見られず、「ソライロノハナ」の中でもこの1例のみであった。

〈ゑ〉

愛でばかゑに行く車びと（四九4）

「ばかり」は他の箇所にも多くみられるがすべて現行字体〈り〉を用いており、この箇所だけ〈ゑ〉を用いた理由は分からなかった。

次の「午後」の部分の〈お〉と〈よ〉はあまり多くなく、すべて格助詞の例（〈よ〉は格助詞「にて」もある）であった。なお、仮名ニについては、これまで多く用例を示したとおり、また右に「若きウエルテルの煩ひ」についても示したように、種々の箇所に用いられているので、以下には〈よ〉の例だけ示す。

〈か〉格助詞以外　35例（「かへりぬ」「かくれたる」「かにかくと」「かふた」「さかんふる」「さかづき」「涙ふがしき」等）

格助詞　7例（わが・我が3、君が1、名詞＋が3「妹が」「夏が」「顔が」）

〈お〉格助詞　3例

（「我ぉ若者」「我ぉ故郷」「前橋の電話交換署にありといふわぉ初戀の人」）

〈よ〉

ぶらじるの海の色よもよく似ると（一一3）

高き声よて言ひし故（一二3）

続く「何處へ行く」の部分には、〈お〉と〈よ〉がほかの部分より数が多く、また先ほど述べたように仮名ナに〈ふ〉だけでなく〈な〉も見られた。〈か〉の格助詞「が」の中には接続助詞「が」1例も含めた。またここにも、「若きウエルテルの煩ひ」と同じく、格助詞以外の〈お〉が1例だけであるが見られた。

〈か〉格助詞以外　113例（「かへり」「かくれぬ」「かあてん」「かのやから」「貝がら」「とがめぬ」「めかして」「ありか」等）

格助詞「が」　48例（わが・我が9、われが1、我等が1、君が1等）

〈お〉格助詞「が」　11例

我ぉ友（六1）、我ぉ影（一八2）、わぉ肩（八1）、わぉ伯父（二一1）等10

君ぉまふざし（二七2）1

格助詞以外

棹さしぉねついづち行くらん（一七2）

〈よ〉6例

おん胸よゆく（一三2）、錢もたぬ日よは（六八4）、

一人よて梅見に行きしが（七六4）、

君がくちびるほのかよも（五六3）等

〈な〉5例

瓢六玉がしなり出て（六一3）、あやまちとなる（七三2）、

行きたくなりぬ（八三2）、

ちりたくなりて（八四3）、となりの男（九三4）

これらの〈な〉は、用例が何頁目にあるかを見ると分かるように、この部分の後半に集中して見られたが、使用傾向の特徴は見出せなかった。

最後の「うすら日」の部分には、変体仮名が〈ち〉しか見られない。これまで見たように仮名ナは〈ち〉が基本字体というべきものであるからこれが多く（19例）、〈な〉は次の3例であった。（格助詞「が」も〈か〉（「光るがさびしかるらむ」「わがたのめごと」の2例）であった。）

〈な〉

しなだれて（三3）、香にしみてなく（六2）、くちなし（九4）

この〈な〉の使用箇所にも特に特徴は見出し難い。

「ソライロノハナ」に見られる変体仮名のうち、〈あ〉と〈よ〉については、僅かに例外（〈あ〉の格助詞以外の3例）は見られるものの、格助詞「が」、格助詞「に」「にて」及びこれに類する箇所、これらに用いるという特徴があることが分かった。

三

「習作集第八巻」に収録されている詩および短歌群（複数の短歌をまとめて題名等が付されている）それぞれは、分量としてはあまり多くないが、どの部分にも変体仮名が見られる。ただし、短い詩の場合、〈ち〉のみ（前節で見たとおり、仮名ナは基本的には〈ち〉であった）であることもある。仮名カ・ニについては使用例をなるべく多く示すことにしたい（括弧内のアラビアは各部分の何行目にあるかを示したもので、題名を第1行としたが、「△」とのみ記す無題のものは詩の最初を第1行とした。なお、線を引いて抹消した部分も文字が判読できるので、取り消し線を付して示す）。

最初の詩「ある日」（末尾に「一九一三、三」と記す）から順に、「放蕩の虫」（題の下に「一九一三、二」）、「歌集「空いろの花」の序に」（末尾に「一九一三、四」）、「女よ」（末尾に「一九一三、四」）、「五月」（末尾に「一九一三、四」）、「こゝろ」、「みちゆき」（末尾に「一九一三、四」）、「さくら」、「△（無題）」、「ひかげおとこ」（末尾に「一九一三、四」）、「ほゝづき」、「五月」、「歌」、「△」、「△」、「ありぢごく」、「涙」、「△」、短歌三十三首に「羽虫の羽」と題を付した部分（末尾に「一九一三、四」）までの部分の例を、まず示すことにする。

仮名カの〈か〉と〈あ〉の使用例は以下のとおり。

〈か〉

花火があがりたり（ある日3・3）　散歩のかへり路（〃6）
たはかれどきの薄らあかり（空色の花の序に3・3）
われば かり（〃7）　かくばかり（〃10・10）
わが胸（女よ6）　そのかぐはしき（〃10）
いつもかくする故に（〃14）　汽車が山路を（五月6）
窓に寄りかゝりて（〃7）　心まかせに（〃10）
ためいきばかりは（こゝろ5）　かく淋しきちり（〃14）

うすらあかり（みちゆき2）　みづがねの如くに（〃5）
ためいきばかり（〃7）　いかばかり女は（〃11・11）
かくばかり（〃14・14）　わがこゝろ（さくら5）
かくばかり（△4・4）　ひかげおとこ（ひかげおとこ1）
日かげおとこ（〃2）　日かげ男（〃7・9）
花が咲く（〃8）　人にかくれて（〃10）
日かげもの（〃13）　青い涙がちりやちらり（〃14）
泣けよかし（ほゝづき3）　かなしさを（5）
その五月が来ないうちに（五月3）　もしかして（〃4）
気まぐれの心から（〃5）　うぐひすか（歌6）
夜のこゝろか（〃7）　鳴くばかり（〃8）
汽笛の鳴るが悲しさ（〃11）　心ぼそきかぎりの（〃12）
若き息子の元吉が（〃14）　はぢき居るかふ（〃15）
さまよひしが（△3）、わが嘆き（〃6）など、この「△」にほか5例
一言（ひとこと）から（△1）　ひとが憎うて（〃2）　男気が（〃4）
ふにかしらねど（ありぢごく8）　あるかふきか（〃11・11）
あとかたもふく（〃13）　髪の毛をかきむしり（△1）
さりふがら（涙4）、わが涙（〃5）など、この「涙」にほか5例
繪をかくも（△1）　かくもやるせふき日を（〃6）
花がたみ（羽虫の羽4）　君かふ（〃7）
月かたむきて（〃9）　わがために（〃12）
いかふらん（〃14）　泣かまくほしく（〃15）
けふわが来れば（〃16）　うたかたの（〃26）
かひふきものは（〃27）　かくとだに（〃28）
小磯が濱の貝がらの（〃40・40）　かひふく濡れて（41）
きのふかへりてかくばかり（〃44・44・44）
かめばあやふく涙するかふ（〃49・49）
かぶと虫黒くひかりて（〃50・50）
柳ちりかひ（〃54）　あかくにほひぬ（55）
せんかたもふき日頃かふ（〃57・57）
おこなひもいかばかり（〃58・58）
かふしかるらむ（〃59・59）　心ばかりは（〃60）

＊〈あ〉

わあ背中（女よ8）
我あ顔（〃11）
わあこゝろ（こゝろ14）
ひろき我あ家もふにかせん（ひかげおとこ3）
ひとを我あ待てば（羽虫の羽4）
あさましき我あおこなひ（〃58）

このように〈あ〉はすべて「わが（我が）」の「が」として用いられている。ただし「わが」の「が」はすべて〈あ〉というのではなく、右に示したとおり、「わが胸」「わがこゝろ」「わが嘆き」「わが涙」の同じく4例は〈か〉で書かれている。変体仮名使用箇所にも現行字体が併用されているが、〈あ〉の用法が、前節で見た「ソラ

イロノハナ」より更に限定されている。

次に、仮名シの二つの使用箇所を示す。

〈し〉

すこし空腹になりしとき（ある日2・2）　楽しさに（〃7）
いとほしや（放蕩の虫6）　哀しさ（空いろの花の序に10）
汝は悲し（女よ15）　ふらんすへ行きたしと（五月2）
あまりに遠し（〃3）　新らしき背廣（〃4）
うれしきこと（〃8）　悲しめども（こゝろ9）
あるかひふしや。（〃10）　かく淋しきふり（〃14）
みづがねの如くにしめやか（みちゆき5）　こちたしや（〃7）
侘しきを（〃10）　悲しさに（〃15）
何をしてあそぶふらん（さくら3）
わがこゝろはつめたくして（〃5）
いとほしや（〃7）
哀しきものをみつめたる我にしも（〃9・9）
さびしさ（△2）　哀しさ（〃5）
女欲しさに（ひかげおとこ11）　かなしさを（ほゝづき5）
もしかして死んでしまったら（五月4・4・4）
もう死んでしまったらどうしよう（〃7・7）
練おしろひ（歌3）　女ほしさに（〃9）
悲しや（〃10・11）　さまよひしが（△3）
川の流れ早くして（〃5）　あそびくらしつ（〃9）
いとしと思ふうれしさ（△12）
抱きしめて抱きしめてこそ（〃13・13）
ほんのふとした（△1）　あさましや（ありぢごく5）
はしり出づれば（〃7）　ふにかしらねど（〃8）
かきむしり（△1）　人をしたひしときは（涙3）
哀しく（〃4）　人を憂しと思ふ（〃6）
涙こぼれしを（〃7）　いとほしと思ふ（10）
流れしものを（12）　流れしは（13）
いかにせし（羽虫の羽14）　泣かまくほしく（〃15）
さしあてたまふ（〃18）　おしめども（〃24）
ぬらして過ぎし夏の雨（〃33・33）　うれしきは（〃42）
うれしきことを（〃45）　あさましき（〃58）
哀しけれ（〃60）

〈し〉

しづこゝろふく（ある日8）
ありやふしや（空いろの花の序に5）
白くつめたし（女よ3）　五月の朝のしのゝめ（五月9）
ほのしらみゆく（みちゆき4）　しのゝめ近き（〃16）
しづこゝろふく（ひかげおとこ6）
泣けよかし（ほゝづき3・〃6）
せきとむるすべしなければ（△5）
いとしと思ふうれしさ（〃11）
しんぞ可愛ゆてらふぬぞへ（△5）
おとし穴の底に（ありぢごく3）　もっぱらにし（涙2）

人を**し**たひしときは（〃3）
かくありて**し**きもの、うへに（〃7）
おし**な**べて（羽虫の羽2）　すこ**し**ぬら**し**て（〃6・6）
出窓にくちづけ**し**こと（〃21）　つげやり**しかふ**（〃23）
しめやかに（〃30）　つげやり**しかふ**（〃29）
よこぎり**し**とき（〃32）　**し**づくに濡れて（〃36）
ゆくゑも**し**らに（〃38）　告げにけら**しふ**（〃45）
忘れ**し**〈濁点あり〉の（〃54）とりつめ**し**心ばかりは（〃60）

これを見ると、〈し〉は、語頭・語頭相当部分または語末・文節末に用いられていることが分かる。一方、現行字体〈し〉は基本的には語中・文節中にあるが、若干〈し〉と同じく語末・文節末（「涙」の「いとほしと思ふ」「流れしは」等）、僅かに語頭（「なにかはしらねど」）にも用いられている。

仮名ナは殆どが変体仮名〈ふ〉であるため、詳しく示すことは省く。既に示した仮名カ・シのところの例を見るだけでも、随所に用いられていることが分かる。これまで見てきた「ある日」からの部分には、全部で88例が見られた。これに対して〈な〉は少なく、次の7例であった。

男ごゝろのかなしさを（ほゝづき3）
五月が来ないうちに（五月3）
せきとむるすべ**し**なければ（△6）
おし**な**べて（羽虫の羽2）
さつき　ながあめ　ふりそめにけり（〃31）
我ゐおこなひも（〃58）　**し**めやかなる（慕郷黄昏曲2）

特徴は見出しにくく、適宜交ぜて用いるということか。このうち、「五月」の例は、この詩に同じ「来ないうちに」が、右の3行目と、8行目「来**ふ**いうちに」との二つがあるため変えたかとも見られなくもないが、これまでにも述べたとおり、そのような場合に常に字体を変えるということでもない。

次に仮名ニについて見るが、ここまで見てきた部分においては〈ゐ〉の例は少ないので、見てきた部分に続く、「鬼ごと」、「白き顔」、「うまごやし」、「別れ路」（末尾に「一九一三、五」）、「成長」、「ゆく春のありや」、「ふるさと」（末尾に「一九一三、五」）、「題しらず」、「いろはがるた」、「題しらず」（末尾に「一九一三、五」）、「一宮川旅情の歌」、「緑蔭」（末尾に「一九一三、五」）、「公園の夏」（末尾に「一九一三、五」）、「慕郷黄昏曲（ノスタルジヤ セレナアド）」、「歌十七首」と記される「林檎の核」、「五月の歌」、「月見草」（末尾に「一九一三、五」）、「一群の鳥」（末尾に「一九一三、八」）、「麦」（末尾に「一九一三、八」）、「ふゞき」、「ひとりみ」、「題しらず」まで、（このあと「ものごゝろ」から「戀魚夜曲」までは〈ゐ〉が見られず〈に〉のみのため省き）これに〈ゐ〉のある「白日夢」、以上の部分も加えて、なるべく多くの例を示していくことにする。

〈に〉

カフスの上に漂ふ（ある日5）　あまりの楽しさに（〃7）
二階に立ちて（〃8）　すゞろにも（放蕩の虫4）
ひんやりに（〃8）　うすら明りに（〃9）

三味線の撥に（〃10）　序に（△2）
石桓にもたれて（〃6）　草のあひだに（〃8）
うすくれふいに（女よ2）　粉白粉のにほひは（〃3・3）
あまりに強く（〃6）など、「女よ」にほか3例
あまりに遠し（五月3）　気まゝふる旅に出でゝ見ん（〃5）
窓に寄りかゝりて（〃7）　心まかせに（〃10）
何にたとへん（こゝろ2）　も、いろに咲く（〃4）
歩むひゞきに（〃8）など、「こゝろ」にほか2例
硝子戸に指のあと（みちゆき3）　みづがねの如くに（〃5）
ニスのにほひも（〃8）など、「みちゆき」にほか3例
櫻の下に人あまた（さくら2）　櫻の木の下に立ちて（〃4）
散りて落つるにも涙（〃6）　あふがちに（〃9）
我にしも（〃9）　淵に身を投げすて（〃14）
日かげおとこの悲しさに（ひかげおとこ2）など、「ひかげおとこ」にほか5例
女のくちにふくまれて（ほゝづき4）
来ないうちに（五月3）　来ふいうちに（〃8）
えんふる君にふる雪は（歌2）
手のひらに練おしろひに（〃3・3）
にほひ にぢめる若き人妻（〃5・5）夜に鳴くうぐひす（〃6）
女ほしさに気も（〃9）　更にくちづけをせよ（〃13）
河邊に来り（△8）　おとし穴の底にひそみ（ありぢごく3）
貪慾の瞳に（〃4）　落つるひゞきに（〃6）
黒い手足に（〃9）　消えにけり（〃13）
手にて髪の毛を（△1）　部室に座るは（△3）
戀にかあるらむ（涙5）　思ふにあらねども（〃6）
うへに涙こぼれしを如何にすべき（〃7・7）
げに今こそ（〃8）　あだに思ふべき（〃11）
来にけり（羽虫の羽3）　遠里小野に月のぼる（〃5）
にほふふりけり（〃9）など、「羽虫の羽」にほか29例
高麗胡のやうに座敷の中をめぐり歩いた（鬼ごと3）
まっさきに逃げだし（〃12）背負って居るに相違ふい（〃19）
こんふに苦しめる（〃20）　角力とりがにらみ合って（〃32）
何をするのもやにふった（〃37）
殺さうとしてるに相違ふい（〃40）
言ふのにさ（〃46）など、「鬼ごと」にほか4例
いづこに行かん（白き顔6）など、「白き顔」にほか2例
やわらかに投げ伏して（うまごやし2）　旅に来りて（6）
白き涙はにじみ（25）など、「うまごやし」にほか9例
橋の袂に別れ行く（別れ路2）など、「別れ路」にほか4例
しめやかに木の芽は成長す（成長2）　飢えたるものに（〃4）
空とつちとにあり（〃8）など、「成長」にほか4例
もよほしにさへ（ゆく春のありや5）　明るまに（〃12）
もの、にほひに涙をがしつゝ（17）など、「ゆく春のありや」にほか5例
庭の隅に来て（題しらず3）　ふにごとかは（〃4）

いつのことにかありけむ（14）など、ほか5例
えてに帆をあげ（いろはがるた3）　左様にいたし（〃21）
ふにごとぞ（〃27）　にっぽん一の（〃29）
こんふ私に惚れたのが（〃31）
にくい伯母御にしめ出され（〃35・35）
うき世をかんずるに（〃44）など「いろはがるた」にほか4例
闇夜にまよひゆく（題しらず3）　よごとに おびゆる（〃4）
いめにはあらで（〃4）　縁ばたに（雨の降る日3）
いつも にじめる指のさき（〃6）　ふりにけり（〃7）
つれづれに（〃9）　渚に一人（一宮川旅情の歌9）
旅より旅に幾日へにけむ（〃11・11）
ふちにちいと鳴けり（緑蔭3）　葉影にかくれ（〃4）
藤椅子によりて（〃5）など、「緑蔭」にほか5例
パンを喰べしに（公園の夏2）　水を飲みしに（〃4）
何處に行かむ（〃10）など、「公園の夏」にほか3例
もよほに（慕郷黄昏曲2）　えにしだの木影（〃4）
ふにしかは（5〃）など、「慕郷黄昏曲」にほか7例
居酒屋の窓に口笛を吹く（林檎の核9）　ひたに走れり（〃12）
きちがひの如くにふりて（〃13）　切に思ふ（〃16）
旅に出づること（17）など、「林檎の核」にほか7例
衾（ふすま）の影にきたり（五月の歌3）　子に送る（〃6）
君にやあらぬ（〃8）　坂梨君に（〃9）
影に座りて（月見草3）　ひとつになりて（〃7）
かくも素直に（〃9）　たれにてもあれ（〃11）
一にほひよき女（〃12）など、「月見草」にほか2例
あの顔にちらりと落ちた（ふゞき7）けんめいになりて（〃8）
わが少女子が泣くときに（ひとりみ3）
かゝる仕末となりにけり（〃9）
思ひしに（題しらず7）　臥床の中にて泣き出せり（〃11）
莖の下に虫つどひ（白日夢3）　くだもの、にほひ（〃9）
邪淫にひたらんとす（〃10）　背に生れ（〃11）
くちびる、にほふ ひなげ（〃15・15）
とゞろきに（〃16）　夢こそいかに忘られね（〃18）

＊〈ゐ〉

ところも知らぬ山里ゐ（みちゆき18）
涙ぞ我の涙ゐて（涙12）
こゝろよきものゐてありき（鬼ごと63）
窓ゐは茴香（うるぎやう）の花も咲けり（ふるさと20）
若き日は既ゐ過ぎ去り（林檎の核2）
たれゐてもあれ（〃22）
赫土（あかつち）の上ゐ續ける蟻の列かふ（〃45）
淋しさゐ少しく慣れて（一群の鳥7）
一目散ゐひたばる（ふゞき4）
ふしぎにも今朝ゐてありけり（題しらず8）
見よや空ゐは日輪もえ（白日夢5）

これを見ると、〈ゐ〉の使用箇所は、格助詞「に」5例、副詞語尾

「に」2例（「既に」「一目散に」）、断定助動詞の連用形「に」4例であり、使用部分がかなり限られ、やはり「ソライロノハナ」と同じ使用傾向が見られる。一方、現行字体の〈に〉は、右に示したように、〈ま〉が用いられた箇所にも、そのほか「にほひ」「にっぽん」「にくい」など自立語語頭にも、「えにしだ」「なに」など語頭以外にも、広く用いられている。

右で加えた「鬼ごと」以降の部分の、ニ以外の仮名も次に見るが、「鬼ごと」には〈あ〉の用法に、これまで見た部分と異なる特徴が見出されるので、仮名カについては「鬼ごと」は別に示すことにする。新たに加えた部分における、仮名シの例を、「ソライロノハナ」では傾向が見出し難いとしたので、こちらの資料では更に多く示しておきたい。

〈し〉

逃げ出したり（鬼ごと12）　倒れてしまひたい（15）
虱を一疋発見した（21）　俺をこん**ち**に苦しめるのだと（20）
而して大膽に接吻したりき（24・24）
價致を失ひたる如し（26）　果して然らば（27）
芝居じみたる動作（54）
どうしても俺を殺そうとしてる（40・40）
あまりに馬鹿々々しき（57）　口をとがらしたときに（58）
すばらしく愉快**ち**る（60）　せられたることありしが（62）
あかしたる（白き顔4）など、「白き顔」にほか3例
青しや（別れ路3）　「かし舟」（〃10）　軽々しや（〃11）
こゝかしこ（〃13）　やゝしば夜や更けぬらむ（〃14）
しん〳〵として（成長5）**し**かうしてわが身とこし**ち**へに（9）
やさしくきよらげにて（10）
ひさしく（ゆく春のありや2）　哀しきまなこ（〃9）
うし**ち**ひ（〃13）など、「ゆく春のありや」ほか2例
古き町にはしりいづ（ふるさと3）　か**ち**しげに（〃5）
さまよひしが（〃15）　影にしのび泣く（題しらず13）
いとしや（いろはがるた14）どうしたて かうしたて（〃17）
左様にいたしませう（〃21）
なじかは よるのふしどをぬけいで（題しらず2・2）
たましひ（〃5）　あさましき（〃7）
哀しく（雨の降る日7）か**ち**しく（〃11）抱きしめる（〃12）
よ**し**やあしや（一宮川旅情の歌2）など、「一宮川旅情の歌」にほか3例
追風にして（緑蔭7）　匂ひ**ち**じみぬ（7）など、「緑蔭」にほか3例
パンを喰べしに（公園の夏2）
やさしくも さしくみきたる涙（慕郷黄昏曲3・3）
ぢぶしい（〃6）　うら哀しく（〃7）　寂しかり（〃8）
すかしみる（〃9）　戀しさに（〃16）
やさしくもさしぐみ来る（〃17・17）
悲しきは（林檎の核6）　悲しき途をば（〃14）
哀しき（〃25）　哀しみて（〃31）　憂しや（五月の歌4）

哀しく　しほれたり（月見草4）　接吻（くちづけ）のして欲しや（〃10）
にほひよき女欲しやとうち嘆く（〃12）
瞳のみづ〳〵しさと哀しさと（〃13）

〈し〉

気味が悪るかりし（鬼ごと9）　あのしやっつらが（〃11）
喧嘩は面白し（〃13）　しかれども我は（〃22）
何時も我はかくの如し（〃25）　以て瞑すべし（〃27）
おばけはこわし（〃28）　然し女の眼は尚こわし（〃29・29）
しつっこい奴だ（〃39）　顔をよせることはおよしよ（43）
おい、およしと言ふのにさ（〃46）　家はふし（白き顔8）
うまごやし（うまごやし1）　うまごやし身を（〃2）
いとしげく戯しさまさり（〃16）
あひふいの名残もしんとせり（別れ路6）
しめやかに（成長2）　緑陰のごとし（〃3）
しん〳〵として（〃5）　しかうして（〃9）
はぐゝまれてしめやかに生長す（〃12）
としひさしく（ゆく春のありや2）　もよほしにさへ（〃5）
人目をしのびて（〃19）　白くつめたし（〃22）
みづをせきとめし（〃25）　雨おとし来らんとして（〃27）
好しと思ふこと（〃31）
しんとせるこゝろにふりて（ふるさと16）
蓄音機のしよぱんをきく（〃18）　題しらず（題しらず1）
音もふし（〃10）　かふしびは（〃11）
ふんとしあんもつきはて、（いろはがるた9）
としちやんとこも（〃11）
ぢっと みつめた しんきくさ（〃19）
左様にいたしませう（〃21）
のらりくらりと しよんがいふ（〃30）
果報か しほらしや（〃32・32）
千鳥あし（〃33）　母御に しめ出され（〃35）
かみしめる（〃40）　題しらず（題しらず1）
よしやあしや（一宮川旅情の歌2）
しばし吹き鳴らさむ（〃3）　ひやし肉（緑蔭2）
しめやかなる のすたるぢやのもよほしに（慕郷黄昏曲2・2）
えにしだの木影（〃4）　すかし見る（〃10）
しんしんたる水の音（林檎の核10・10）　充たすふし（〃18）
いと悲し（〃20）　ともし油（五月の歌2）
哀しくしほれたり（月見草4）　待つとしはふけれども（〃8）
接吻のして欲しや（〃10）
瞳のみづ〳〵しさと哀しさと（〃13）

このように、既に述べたとおり、語（文節）の、頭および末に〈し〉、中に〈し〉という傾向がやはり見られる。

仮名ナは、基本的には〈ふ〉が使用されているので、〈な〉の例のみ示すが、「（歌二十首）」と記されている「一群の鳥」から後の部分は、用字の傾向に変化が見られるため、まずは「月見草」までの部分の実態を示すことにする。

〈な〉

哀しきまなこもて（ゆく春のありや9）

かなしくも ふるさとに帰り居て（ふるさと13）

くさばなの種（題しらず「一九一三、五」2）

なじかは（題しらず「一九一三、五」2）

なにが かちしく（雨の降る日11）

鶇（つぐみ）ふくなり（一宮川旅情の歌7）

しめやかなる（慕郷黄昏曲2）

七月中旬（なかば）（林檎の核38）

消えぬべらなり（五月の歌5）

日中（ひなか）（月見草4）

ひとつになりて（〃7）

〈ち〉は、この部分に103例見られるので、右の〈な〉の11例よりもずっと多い。また、これまでと同様、〈な〉の用法に特徴は見出せない。

続いて、「鬼ごと」以外の、右までのところで加えた部分の仮名カについて見ることにするが、ここでは、仮名ニで加えた部分に、更に仮名ニでは省いた、「ものごゝろ」、「稚子」、「△」、「△」、「濱邊」（末尾に「大正三年八月十七日」）、「秋」（末尾に「大正二年八月二十三日」）、「目無し魚」、「歌」（次の「戀魚夜曲」は省く）、「白日夢」、「我をいとほしむ歌」（末尾に「一九一三、九、七」）も加える。まとめつつもやはりなるべく多くの例を示しておきたい。

〈か〉

「わが（我が）」は23例で、「わがおこふひ」（「白き顔」17）・「わが身」（「成長」9）・「わが身も」（「ゆく春のありや」20）・「わが身のうへに」（〃31）・「わがうしろに」（「ふるさと」9）・「わがふるさとの前橋」（〃12）・「わが田舎ずまひ」（〃19）、「わが庭の隅に来て」（題しらず3）、「わが身のいたさ」（「いろはがるた」45）・「わがたましひ」（（「題しらず」5）・「わが独り身ちるは」（林檎の核20）・「わが魂（たましひ）を」（〃32）・「わが心狂へりと」）（〃39）・「わがごとも（月見草5）・「わが待ち居れば」（〃9）・「わが若き瞳の」（〃13）・「我が身の上にめぐり来るならむ」（一群の鳥55）・「わが少女子が泣くときに」（ひとりみ3）「われとわが身を」（5）・「わが肩によりすがり」（ものごゝろ13）・「我がものごゝろの」（〃19）・「わが目無し」（目無し魚3）・「わが目無し魚」（〃18）・「わが身は」（白日夢14）・「わが身の」（我をいとほしむ歌2）・「わが手にわが身を抱くのみ」（〃16・16）・「わが身の外にはあらぢかし」（〃17）。

このほか、「爪かむときの」（「うまごやし」15）・「ごんがん、ごんがん、鐘鳴る」（〃20）・「「かし舟」の提灯（かんばん）」（〃10・10）・「吐息をかぐ」（「成長」7）・「かうして」（〃9）・「ひかりに」（〃12）・「讀まんとするか」（「ゆく春のありや」10）・「あかま書（ふみ）を」（〃8）・「露路のかげより」（〃15）・「かすかちる」（「ふるさと」10・10）・「電車はがたこんと」（〃11）・「さまよひしが」（〃15）・「たれかは知らねど」（題しらず2）・「ちにごとかは」（〃4）・「そこはかとちく這ひあるく」（〃9）・「いま逢魔ぢときのかちしびは」（〃11）・「いつのことにかありけむ」（〃14）・「かくもやさしき君が瞳に」

(「緑蔭」10・10)・「玉をふづるが如し」(〃13)・「いろはがるたの「え」」(「いろはがるた」2)・「うき世をかんずるに」(〃44)・「たそがれて」(「一宮川旅情の歌」13)・「かふしかりき」(「公園の夏」5)・「何處に行かむ」(〃10)・「しめやかなる」(慕郷黄昏曲2)・「ふにしかは」(〃5)・「寂しかり」(〃8)・「すかしみる」(〃9)・「すかし見る」(〃10)・「何時までか」(〃12)・「黄昏(たはかれ)」(〃12)・「床(ゆか)」(林檎の核19)・「人はふきか」(〃23)・「石ころが、我に蹈まれて」(〃29)、「かくありと」(五月の歌4)、「焼(も)えふがら」(〃4)・「かくも素直に(月見草9)・「かへりみて」(一群の鳥3)・「人にかくれて」(〃5)・「我のはかなさ」(〃6)・「かの遠き赤城を望む」(〃10)・「かの頃の歌」(〃19)・「空ばかり眺めてありし」(〃24)・「なつかしき日よ」(28)・「かく問ひし」(44)・「この日ひそかに」(47)・「死ぬよりは尚よろしかり」(51)・「とかくして」(52)・「いつの日か」(54)・「つかれし心が泣き出せり」(麦9・9)・「申かげもの」(ひとりみ8)・「酒がまゝすぎて」(〃9)・「かゝる仕末となりにけり」(〃9)・「かの家をのがれ出でしは」(題しらず6・6)・「いつの日のことかと思ひしに」(〃7)・「うすらあかり(ものごゝろ3)」・「濡らすべきか」(〃8)・「ふくらかなる白きお指」(〃10)・「やみがたき情愁の海に」(〃11)・「かくも」(〃13)・「貝がら」(濱邊9)・「かの遠き渚に」(〃14)・「かもめどり」(18)・「ひそかに草に手をあてゝ」(秋6)・「はるかなる湖うみの」(〃11)・「かの高きより」(〃16)・「鱗ひかりて」(目無し魚9)・「吐息もかゞで住みければ」(〃13)・「それともたれか知るべしやは」(〃15)・「うかゞへば」(〃17)・「あづさ弓かへらぬひとの」(歌2)・「泣かまほしけれ」(〃4)・「なにが哀しく」(〃11)・「くだものゝにほひをかぎ(9)・「やみがたき没落」(白日夢10)・「夢こそいかに忘られね」(〃18)・「なかりしが」(我をいとほしむ歌4)・「おどろかざりき」(〃10)・「我をたわかりて」(〃12)など、全部で188例あった。

＊〈わ〉

いま逢魔わときのかふしびは(題しらず11)
わわこゝろの影に(〃13)
我わ白き指にすかしみる(慕郷黄昏曲9)
わわ影ふりき(林檎の核35)
わわ部屋の窓に(一群の鳥11)
わわ古き友の(〃45)
わわふるまひを咲きつゝ(題しらず5)
我わ性のうすらあかりは(ものごゝろ2)
我わ足の指に(濱邊4)
我わつむ花は(秋8)
わわ身を草木の影に(〃13)
我わよろこびとぞ成りにける(目無し魚20)
まんどりん、ちゝろちゝろとわわ弾けば(歌10)
八月なかば、わわ心いたく飢えて(白日夢8)
わわ身のうれひにしづめるは(我をいとほしむ歌18)

このように、この部分でも、15例中14例、すなわち殆どがやはり

「わが（我が）」（多くは連体詞「わが」であるが、「秋」「歌」のように「わ」（我）＋格助詞「が」の例もあるので、「わが」の「が」も格助詞としてまとめる）の「が」であるが、最初の「題しらず」の1例は、「わが」以外の格助詞「が」として用いられている。この用法が、別に見ることにするとした詩「鬼ごと」には複数例見られる。この「鬼ごと」の仮名カについて次に示す。

〈か〉

かうみえても（5）　かう言ひて（8）
気味が悪るかり**し**（9・9）　かう言って（12）
あゝつかれた（14）　**し**かれども我は驚かざりき（22・22）
かくの如**し**（25）　角力とりがにらみ合って居る（32）
早く立った方が負け**ふ**り（34）
そうやって居る方がいゝ（35）　もうすっかり（36）
死んだ方**ゐ**よかった（38）
ふんだかへん**ふ**風に**ふ**るから（44・44）
きちがひか白痴か（47・47・47）
眼のいろが變ってら（48）　わが帯は解けて（51）
跳びあがりて（53）　人が見て居るかも知れず（55・55）
口をとがらしたときに（58）　かく女は教へき（61）
せられたることありしが（62）
ちやちやらか、ちやちやらか（64・64）
かう見えても我は我**ふ**り（65）

＊〈ゐ〉

死んだ方**ゐ**よかった（38）
あの眼**ゐ**それ**ふ**り（41）
あの眼**ゐ**……（42）

この〈ゐ〉の例を見ると分かるように、この詩では、今まで見た〈ゐ〉が1例以外すべて「わが（我が）」の「が」として用いられていたのとは異なり、「わ」以外の語に付く格助詞「が」として用いられている。〈ゐ〉が格助詞「が」の箇所に用いられるという点は、前節で見た「ソライロノハナ」の場合と同じである。なお、この詩において格助詞「が」を現行字体〈か〉で書いた例は、右に示したとおり「わが」の1例「わが帯」と、「気味が」「角力とりが」「方が」「眼のいろが」「人が」など6例であり、この〈か〉のほうが、用例数は多い。また、接続助詞「が」1例「ありしが」もあった。

ところで、「（歌二十首）」と記されている「一群の鳥」（末尾に「一九一三、八」）には、仮名ナに変化が見られる。これまでの部分では殆ど〈**ふ**〉で書かれているのに対し、すべて〈な〉で書かれるという特異性がある。この詩のあと、暫く同様の傾向が見られるので、仮名ナの使用箇所を順に示してみる。

「一群の鳥」

〈な〉

涙はてな**し**（4）　歌などつくる我のはかなさ（6・6）
なにがな**し**（8）　眞剣になりて（54）
めぐり来るならむ（55）

「ふゞき」

〈な〉
　けんめいになりて走れよ（8）　なんの吹雪ぞ（12）
「ひとりみ」
〈な〉
　泣くなよ娘（2）　かゝる仕末となりにけり（9）
　せんすべもなや（11）
「題しらず」
〈な〉
　おほいなるその顔の（2）　あまりならずや（9）
「ものごゝろ」
〈な〉
　なでしこの花（4）　ふくらかなる白きお指（10）
　なになれば（13・13）　くさばなの吐息（14）
　ひるもゆうべもやむごとな（17）　かくもいたいけなる（19）
「稚子」
〈な〉
　おびへ啼（な）く（6）　やるせなき（7）
「△」
〈な〉
　ほの痒くなる指のさき（2）
「濱邊」
〈な〉
　一人はなれて（3）　やるせなき日の（17）
　涯（はて）なき地平を（19）
「秋」
〈な〉
　せはしなく（3）　白きなれども（8）
　花びらに光りなく（9）　はるかなる湖うみの（11）
　さやかなる野分（14）
「目無し魚」
〈ふ〉
　住み**ふ**れて（2）　そよぐこと**ふ**ければ（5）
　この身を果敢**ふ**みて（16）
〈な〉
　底なき底（17）
「歌」
〈な〉
　雪のはかなさ（3）　忘られなくに（9）
　なにが哀しく（11）　色まさるなり（15）
「戀魚夜曲」
〈な〉
　あてなき眸（4）　夜なれや（9）
　言葉なく二人さし寄り（10）　潮風に**し**ばなく鷗（12）
　身ともなりぬれば（14）
「白日夢」
〈な〉

涯なき地平を（4）　きほひ猛なる（6）
八月なかば（8）　くちなはの（11）
ひなげし（15）

「我をいとほしむ歌」

〈な〉

もの、なければなり（3・19）
よはきひとにはなかりしが（4）

このように、「一群の鳥」以降巻末まで、急に〈な〉ばかりが使用されるようになる。「目無し魚」のところだけは〈ち〉のほうが多くなるものの、またすぐ〈な〉専用に戻っている。この変化には何か理由があるのか、変化したことに意味があるのか、今のところ分からない。萩原朔太郎の仮名ナの基本は〈ち〉であると見られるから、この部分における〈な〉専用への変化は何か意味があるのかもしれないが。「ソライロノハナ」においても、最後の二つの部分にのみ見られた。このように共通して終わり近くになると〈な〉が使用される点は興味深い特徴であるが、その意味するところは分からなかった。

以上のように、変体仮名が使用される箇所には、前節で見た「ソライロノハナ」と共通の特徴が見出された。特に、〈あ〉と〈ま〉の使用箇所に殆ど例外が無い点は注目される。

四

続いて、昭和時代になってからのものとして、『氷島』の原稿を検討する。これまで見てきた資料に比べると分量はあまり多くないので、仮名カ・シ・ナ・ニの使用箇所すべてを示しておく。

○「漂泊者の歌」

カ

〈か〉

いかちれば（10）　意志ちき寂寥を（14）
耐えたるかち！（16）　信ずることちく（17）
蹈み切れかし。（14）　耐えたるかち！（16）
かつて何物をも（17）　かつて欲情の（19）
いかちれば（21）　かつて何物をも（23）
何物もまたかつて（24）

シ

〈し〉

寂しき影（6）　やさしく抱かれ（21）
悲しき落日の（26）

〈し〉

滄爾として（10）　輪廻を斷絶して（13）
蹈み切れかし。（14）　孤独にして（15）
愛せざるべし（24）　有らざるべし（28）
有らざるべし（29）

ナ

〈ち〉

耐えたるかふ！（16）　信ずることふく（17）
いかふればまた（21）　意志ふき斷崖を（27）

ニ

〈に〉

斷崖の上に登り（2）　無限に遠き（4）
鉄路の柵の背後（うしろ）に（5）　時計の如くに憂ひ（11）
孤独にして（15）　いづこに家郷は（28）

○「遊園地（ルナパーク）にて」

カ

〈か〉

君が瞳孔（ひとみ）に（10）　たたえ給ふか。（11）

シ

〈し〉

目まぐるしく（4）　寂しきふり。（9）
やさしき憂愁を（11）　寂しきふり。（26）

〈し〉

惜したまへや（13）
飛べよかし！　飛べよかし！（21）（21）
君の円舞曲（わるつ）は遠くして（25）

ナ

〈ふ〉

遊園地（ルナパーク）の午後ふりき（2）　寂しきふり。（9）
ふにふれば（10・10）　果敢ふき憂愁を捨て（20）
寂しきふり。（26）

ニ

〈に〉

遊園地（ルナパーク）にて（1）　群集の上に飛び行けり（6）
此所に来りて（7）　座席に乗れど（8）
側へに思惟するものは（9）
ふにふれば君が瞳孔（ひとみ）に（10・10）
座席に肩を寄りそひて（12）　空の向ふに（14）
暮春に迫る（17）　われら既にこれを見たり（18）
群集の中に混りて（23）　座席に乗れど（24）
側へに思惟するものは（26）

○「歸郷」

カ

〈か〉

わが故郷に帰へる日（2）　ひそかに（10）
いかんぞ故郷に一人歸り（18）

シ

〈し〉

絶望の崖（振り仮名「き〈し〉」）（14）
暗憺として長（振り仮名「とこ〈し〉」）ふへに（17・17）
さびしくまた（19）　烈しくせり。（22）

ナ

〈ち〉

母ちき小供等（9）　探れるちり。（10）

過去は寂寥の谷に連ちり（13）　砂礫の如き人生かち（15）

長ちへに生きる（17）

ニ

〈に〉

わが故郷に帰へる日（2）　ひとり車窓に目醒むれば（4）

車室ほの暗き燈火の影に（8）　ひそかに皆わが憂愁を（10）

何所の家郷に行かんとする（12）　谷に連ちり（13）

絶望の崖に向へり。（14）　われ既に勇氣おとろへ（16）

長ちへに生きるに倦みたり。（17・17）

故郷に一人歸り（18）　利根川の岸に立たんや（19）

自然の荒寥たる意志の向ふに（21）

○「告別」

カ

〈か〉

國境を越え行かんとす。（5）　人のいかちる愛着もて（6）

かくも機關車の火力（7）　悲しみの底に齒がみしつつ（10）

シ

〈し〉

烈しき熱情を（8）　悲しみの底に齒がみしつつ（10）

出発せんと欲して（12）　すさまじく蒸気を噴き出し（13）

〈し〉

出発せんと欲し（2）　悲しみの底に齒がみしつつ（10）

すさまじく蒸気を噴き出し（13）

汽笛を鳴らし吹き鳴らせり。（15）

ナ

〈ち〉

いかちる愛着もて（6）　烈しき熱情をちだめ得んや。（8）

ニ

〈に〉

汽鑵に石炭は積まれたり。（3）　驛路に見送る人々よ（9）

悲しみの底に齒がみしつつ（10）　傷みに破る勿れ。（11）

裂けたる如くに吠え叫び（14）

○「無用の書物」

カ

〈か〉

いかれば（11）　かくも黄色く古びたる（12）

わが情熱するものを情熱しつつ（13）

シ

〈し〉

わが情熱するものを情熱しつつ（13）　寂しき人生（14）

〈し〉

一銭にて人に賣るべし。（8）（22）
いかゐれば涙を流して（11）
われの認識は空無にして（15）
買ふものはこれを買ふべし（17）

ナ

〈ゐ〉

肋骨(あばら)みゐ瘠せ（4）　いかゐれば涙を流して（11）

ニ

〈に〉

路上に書物を賣れる（3）　軍鶏の如くに叫べるを（5）
一銭にて人に賣るべし。（8・8）（22・22）
冬近き日に袷をきて（9）　われの認識は空無にして（15）
無價値に盡きたり。（16）　路上に行んは（18）

以上のように、『氷島』詩稿では、仮名カ・ニに〈あ〉〈よ〉を全く使用しなくなっている。現行字体の〈か〉〈に〉しか用いていない。

また、大正初期の二つの資料では、仮名ナの殆どは〈ゐ〉で書かれてはいたが、〈な〉を用いることもある程度あった。しかし『氷島』になると、現行字体〈な〉を全く用いなくなっている。

このような特徴は、今回調査した資料に限らず、他の資料にも認められるようである。萩原朔太郎の葉書・書簡はかなりの量のものが残っていて、それらの調査は改めて行いたいと考えているが、青木正美解説『近代詩人・歌人自筆原稿集』に6通収録されている大正三年の葉書を見ると、「寂しい日あつゞきます」「まるで生活あちがふので妙ゐ気あします」（7月5日）など、〈あ〉が散見する。一方、同書に収録されている、昭和一〇年（一九三五）一〇月『文學會』掲載の「文藝懇話會のこと」原稿では、「入賞が小説ばかりで」「噂がある」「それが出来たら」「詩が文藝意識から除外視され」「頭が下るものがある」など、格助詞「が」はすべて現行字体〈か〉で書かれている。〈よ〉についても同様の特徴が見出される。これら今回詳しい調査を行わなかった資料については更に多くのものを詳細に検討する必要があるが、大正初期と昭和期とで、朔太郎の変体仮名使用に変化が見られたことは明らかである。[8] 佐藤（二〇〇五）（二〇〇七）には、夏目漱石の初期と中期以降とを比較すると、基本的には「異体仮名の淘汰と一字体への収斂」という方向性の変化が見られるとの指摘があるが、萩原朔太郎にも同様の変化が認められると言えそうである。ただし、仮名ナについては、次に述べるような注意すべき点がある。

仮名ナは、右に仮名カの例を見た『近代詩人・歌人自筆原稿集』収録の資料でも、また特集雑誌や文学館の図録類に収録されている原稿、例えば、別冊太陽『近代詩人百人』（一九七八）収録の習作時代の詩稿「理想」「真似」や、前橋文学館『萩原朔太郎―抒情の光彩―』（一九九六）収録の原稿「月光とくらげ」「戀を戀するひと」などの図版を見ても、更に葉書・書簡の写真を幾つかみても、すべて〈ゐ〉であり、基本的には仮名ナ＝〈ゐ〉であったことが分

かる。〈ふ〉に「収斂」はしたが、これは「いわゆる」変体仮名の淘汰ではない。なお、大正初期の資料における〈な〉の使用は、朔太郎にとって特別な用字であった可能性もあるが、更なる調査が必要であろう。

〈し〉〈し゛〉については、これまで検討してきた大正初期の資料に見られたものと同じ特徴、語・文節の、頭または末に〈し゛〉、中に〈し〉を用いるという傾向が、この『氷島』詩稿にも見られると言ってよい。したがって、〈し゛〉は行頭・行末に使用されることも（詩の場合、一行の字数があまり多くないため）、多くなっている。ただし、詩「歸郷」だけは例外で、4例のみ（うち2例は振り仮名）であるが、すべて〈し゛〉で書かれており、他の詩では〈し〉が用いられることの多い「さびしく」「烈しく」の箇所にも〈し゛〉を用いている。

この〈し〉〈し゛〉の使用傾向は、仮名カ・ニやナとは異なり、この昭和期になっても、変化が見られない。繰り返しになるが葉書・書簡等について詳しい調査を行う必要はあるものの、一瞥した感じでは、最初の節においても述べたように、葉書等では専ら〈し〉を用い、〈し゛〉を使用していないことから、特に注意が払われたと見られる浄書的なものを書く場合に、何らかのまとまりを感じた文字連続の初めか終りの箇所に、ある程度の注意を払って丁寧に2画で書くという性質のものであったと考えられる。大正初期でも昭和期でも、どの時期かにかかわらず、浄書的な態度で臨む場合に書かれるものということであろう。最初の節で述べたとおりシの二つの字体としたものは形の違いの程度の非常に小さいものであり、変体仮名という意識もなかったであろう。

五

今回、萩原朔太郎の変体仮名使用に関して、以下の点が明らかになった。（なおシは一応括弧に入れて示す。）

・仮名ナ

基本的には〈ふ〉を用いる。

大正初期――〈ふ〉を広く用いる中に時々〈な〉を用いることがあった。

昭和期――専ら〈ふ〉を用いる。

・仮名カ

大正初期――〈か〉を広く用いる中に時々〈あ〉を用いる。

〈あ〉は、格助詞「が」（連体詞「わが」の「が」を含む）にほぼ限定。

（「習作集第八巻」では殆どが「わが」の「が」として用いられている。）

ただし、格助詞「が」も、〈か〉を用いることが同程度またはそれ以上ある。

昭和期――専ら〈か〉を用いるようになる。

・仮名ニ

大正初期――〈に〉を広く用いる中に時々〈ほ〉を用いる。

〈ほ〉は、格助詞「に」およびそれに類する箇所限定。

ただし、右の箇所も〈に〉を用いることが多い。

昭和期――専ら〈に〉を用いるようになる。

（・仮名シ）

浄書的資料では、〈し〉と、2画で書く〈し〉を併用する。

〈し〉を用いる場合、主に、語・文節の、頭・末――〈し〉

中　――〈し〉

以上の特徴のうち、〈あ〉〈ま〉の放棄については、変体仮名の淘汰という時代の流れに沿ったものであるが、〈ふ〉への収斂に関しては、時代の流れ（〈な〉を正体と考えることが一般的であったならば）に逆行するものであるとも言える。変体仮名のうち、最後まで残ったものは〈ふ〉であったと見られるので、[9] 現時点では不明であるが、〈な〉よりも〈ふ〉のほうが好まれる何らかの理由があったと推測され、朔太郎にとっても使いやすい字体であったと考えられる。

〈あ〉と〈ま〉の使用箇所の限定に関して、格助詞およびそれに類する箇所に使うという用法は、何となく予想されやすいものであるが、手書き資料で実際このような使い方をしているという報告は、必ずしも多くない。〈ま〉については、佐藤（二〇〇七）などで、夏目漱石が「には」「にも」「にして」などに限定して使うということが報告されている。萩原朔太郎と全く同じ用法ではないが、格助詞「に」の類に使用するという用法はある程度広く行われていたと言える。[10]

大正生れの作家においては、〈ふ〉以外の変体仮名を用いる作家は既に殆ど見られなくなっており、また〈あ〉〈ま〉を用いる作家はこれらの変体仮名専用であったり使用していても用例が少なかったり等の点により、もう用法の傾向等を見出せない段階となっていた。その点、今回の調査では、萩原朔太郎の〈あ〉〈ま〉の用法の特徴を見出せ、格助詞類限定使用の実態を確認することができた。

また、今回の調査は詩を中心としたものであり、対句的な表現が多用されることも、変体仮名使用に関係するかもしれない。「浄罪詩篇ノオト」と呼ばれるノートの「竹」の草稿を見ると、同じ表現の繰り返しの部分において、「地面に生い立ち」「地面ま生い立ち」、「地面に生え」「地面ま生え」のように、助詞「に」の仮名の用字を変えている。使用できる字体が二つあるのなら、このような場合に両方を用いたいと感じるのは自然なことであろう。[11]

しかし結局は、変体仮名は使用されなくなった。右に述べた用字の変換は、既に示したとおり常に行われるわけではなく、恣意的に行われている。また、格助詞などの限定箇所のすべてが変体仮名になっているわけでもない。変体仮名使用の効果は大きいものではない。更に、出版される本においては既に変体仮名が一般的では全くなくなっているから、原稿で仮名字体を工夫しても無意味である。したがって、『氷島』原稿で〈し〉が使用されているというのも、意図的なものではなく、注意が払われやすい箇所を丁寧に書いたということであろうと推測される。そう考えると、今回調査した大正初期の資料が、朔太郎が自分で仕立てた本であり浄書的なノートである点も、変体仮名の用法に関わっていると見られる。また、今回

1例だけ見られた〈ゑ〉の使用は、使う変体仮名ではあるが使用を控えるべきだと意識されていたものを思わず用いてしまった結果かもしれない。種類の異なる資料の場合は変体仮名使用に違いが見られるのかどうか等、更に追究を行いたいと考えている。

注1　高田・矢田・斎藤（二〇一五）に「すでに一八八七（明治二〇）年以降には、活版印刷の世界で変体仮名の使用が顕著に衰退しており、「小学校令施行規則」はそうした現状を後追いするものであったというのも事実であって」とあるように、大正時代以降は既に変体仮名が衰退してしまった時期である。銭谷（二〇一四）には、明治二八年の毎日新聞に変体仮名が全く用いられない号があるということが示されていて、明治三三年の「小学校令施行規則」より早い段階において字体統一がなされていたとみなせることが述べられている。

2　大正生れの作家の調査は久保田（二〇二一）で報告したものであるが、複数の変体仮名を使用していた数少ない作家として、〈ゐ〉〈ゑ〉〈ゟ〉の船山馨、〈ゐ〉〈ゑ〉の北條誠、〈ゐ〉〈ゟ〉の小沼丹、〈ゑ〉〈ゟ〉の藤原審爾などが挙げられる。

3　佐藤（二〇〇七）によった。ここに示した八つの変体仮名のほかに、仮名キに「ゐ」の1画目が分離した字体があるとのことであるが、別字体と認め得るか迷うところもあるようなのでここでは省略した。なお、漱石の『硝子戸の中』自筆原稿を調査した岡（一九七七）には、〈ゐ〉〈ゟ〉〈ゑ〉が用いられる（濁点の付いたものが分けて示されているがここではまとめて一つにした）とあり、「ごくまれに〈ゑ〉〈ゟ〉〈ゑ〉が使われている」とあって、当然のことながら作品により異なる部分はあるようである。夏目漱石以外では、前田（一九九四）において、樋口一葉（明治五年生れ）の『たけくらべ』の調査が行われており、「たけくらべ」再所収の『文芸倶楽部』本草稿では〈ゐ〉〈ま〉〈ゟ〉〈ゐ〉〈ゟ〉〈ゟ〉〈ゑ〉〈ゟ〉〈ゑ〉〈ゑ〉〈ゟ〉など（更に仮名ナ・ラにも2種類の字体。これらは同一の字体とも考えられるが）の見られることが示されている。

4　銭谷（二〇一五）には、幸田露伴（慶応三年生れ）の『巣林子の二面』（大正一五年）では〈ゐ〉〈ゟ〉〈ゟ〉〈ゟ〉〈ゟ〉など、島崎藤村（明治五年生れ）の『昨日と一昨日』（大正八年）では〈ゟ〉〈ゟ〉〈ゟ〉〈ゟ〉〈ゟ〉〈ゟ〉など（この論考でも濁点付きは分けて示されているが、以上にはまとめて一つにした）が示されている（このように、朔太郎使用の変体仮名を含み、更に多くを使用する段階が窺われる）が、大正期の原稿の調査も行われていて、有島武郎（明治一一年生れ）の『再び本間久雄氏に』（大正九年）では仮名モに2種類あるのみ、若山牧水（明治一八年生れ）の『姉への手紙』（大正一三年）では仮名ナの2種類と〈ゟ〉のみとのことである。これを見ると、生年の近い作家と比べても、朔太郎の変体仮名使用は検討する価値のあることが分かる。

5　萩原葉子編『萩原朔太郎・「月に吠える」時代の草稿詩篇』を少し見ると、解読の難しい、書き殴ったような草稿には〈し〉しか見受けられないのに対し、一字一字丁寧に書かれた、例えば詩「歩行して居る人の印象」などでは「歩行**し**ている」「**し**るくはっと」など〈し〉と、「すばらしく」の〈し〉の区別が可能である。

6　渋谷（一九六二）において、「ノートの書き方も「緑蔭倶楽部」あたりまでは浄書という態度が見られるが、その後は次第にメモ的な書き方に近づいている」と指摘されている。（「緑蔭倶楽部」は第九巻の中に見られる詩。）

7　今回調査を行った資料は、以下のものによった。複製の情報等は藤井（二〇二二）も参考にした。

・ソライロノハナ
新選　名著複刻全集　近代文学館『萩原朔太郎著「ソライロノハナ」自筆歌集複製』（ほるぷ出版、一九八五年一〇月）

・習作集（愛憐詩篇ノオト）
近代文芸資料複刻叢書第三巻『萩原朔太郎肉筆手稿集「愛憐詩篇ノオト（前後二巻）」』（世界文庫、一九六二年一一月）

・『月に吠える』時代の詩の草稿等

萩原葉子編『萩原朔太郎・「月に吠える」時代の草稿詩篇』(雪華社、一九七一年一)
・浄罪詩篇ノオトA
『「生誕125年　萩原朔太郎展」図録』(世田谷文学館、二〇一一年一〇月)
・詩集『氷島』の原稿
伊藤信吉編『「氷島」詩稿』(冬至書房、一九六三年三月)
・文藝懇話會のこと(一九三五年一〇月『文學會』「詩壇時言」)原稿
保昌正夫監修・青木正美解説『近代詩人・歌人自筆原稿集』東京堂出版、二〇〇二年六月)

8　『萩原朔太郎全集　第十二巻』(筑摩書房)には、23冊存在が確認されているという「未発表ノート」が収録されているが、その解説に、「著者は大正の後半ごろに、大正初期の字体から昭和期の字体へと変化している」という記述が見られる。この「字体」がどのようなものを指すか不明ではあるが、書く文字に変化が生じたということがあるようである。伊藤(一九六三)には『氷島』原稿の文字がほかのものより格別である旨が述べられている。

9　久保田(二〇二一)の調査では、〈ち〉のみを使用する作家が最も多かった。また、岡(一九七七)には、川端康成(明治三二年生れ)の『山の音』では〈ち〉、小林秀雄(明治三五年生れ)の『本居宣長』では〈ち〉と〈ち〉が、それぞれ原稿で使われると述べられていて、このあたりの生れになると、大正生れと同じ変体仮名使用になっていることが窺える。

10　太田(一九九七)では、『あひゞき』初訳に見られる〈ゝ〉は形容動詞語尾の「に」8例、副詞2例(如何にも・兎に角)、格助詞「に」3例であると報告されている。このような出版物における用いられ方も影響していると見られる。また、変体仮名使用への影響という点では、教育ということも考慮する必要がある。変体仮名の教育については、岡田(二〇二一)などで考察が行われている。

11　既に種々の文献について指摘されていることであるが、自筆原稿ということでは、笹原(二〇〇〇)に、仮名ハに視覚的な単調さを避けるための表記が多い点などの言及がある。

参考文献

伊藤信吉(一九六三)『「氷島」詩稿　別冊』(冬至書房)
太田紘子(一九九七)『二葉亭四迷『あひゞき』の表記研究と本文・索引』(和泉書院)
岡三郎(一九七七)「漱石の用字―とくに自筆稿本「硝子戸の中」を中心に―」(『ビブリオ』第65号)
岡田一祐(二〇二一)「変体仮名を学ぶ小学生」(加藤重弘・岡墻裕剛編『日本語文字論の挑戦』勉誠出版)
久保田篤(二〇二一)「大正生れの作家の手書き資料に見られる変体仮名―船山馨・北條誠・小沼丹の使用例など―」(『成蹊国文』第54号)
今野真二(二〇一四)『自筆原稿』(日本語学講座第8巻、清文堂出版)
笹原宏之(二〇〇〇)「『竪琴草紙』の文字・表記」(山田俊治・十重田裕一・笹原宏之『山田美妙『竪琴草紙』本文の研究』笠間書院)
佐藤栄作(二〇〇五)「漱石自筆原稿の文字―『坊っちゃん』と『心』」(第七回表記研究会発表資料)
佐藤栄作(二〇〇七)「『道草』の書き潰し原稿と最終原稿の文字・表記」(『国語文字史の研究　十』和泉書院)
渋谷国忠(一九六二)「「愛憐詩篇ノオト」解説」(『愛憐詩篇ノオト』(前後二巻)付録、世界文庫)
銭谷真人(二〇一四)「『横浜毎日新聞』における仮名字体および仮名文字遣い―明治期の新聞における字体の統一について―」(『日本語の研究』10巻4号)
銭谷真人(二〇一五)「近代作家の自筆原稿における仮名字体―手書きに残った異体仮名について―」(『早稲田日本語研究』第19号)
高田智和・矢田勉・斎藤達哉(二〇一五)「変体仮名のこれまでとこれから情報交換のための標準化」(『情報管理』58巻6号)
藤井哲(二〇二二)「複製された手書き原稿で日本近代文学を愉しもう

（3）」（『福岡大学人文論叢』54巻1号）
前田富祺（一九九四）「『たけくらべ』における平仮名の書体と字体」（前田富祺編『国語文字史の研究　二』和泉書院）

（くぼた・あつし　本学教授）